元米兵の原爆不要論

社会部　高田　未来

取材 最前線

「後世が忘却すべきでない戦争の犠牲。学ぶべき永遠の教訓がここにある」。今治空襲など日本各地の爆撃に従事した元B29搭乗員ハーセル・リード・バーンさん(故人)が2008年、今治明徳高校矢田分校の招きで来日し、広島平和記念資料館にある対話ノートに書き込んでいた。

資料館では、黒焦げになった被爆者の写真や人の影が残った石段などを静かに見入った後、確信していた思いを言葉にした。「当時、日本はすでに軍事的に壊滅状態で、民間人に多大な犠牲が出る原爆投下は不必要だった」。本土決戦で失われたかもしれない日米の命を救った「原爆正当化論」が米国に広がる中で、元米兵が「原爆不要」と言い切ったことは、忘れられない出来事だった。

それから7年、あらためて広島を訪れた。被爆者は生き残った罪悪感や放射線障害への不安を抱き続ける中、「核拡散防止条約（NPT）再検討会議」で広島・長崎への訪問要請が最終文書案から削除されたことを嘆いていた。各国指導者は被爆地で核兵器の非人道性に向き合うべきだ。元米兵も訴えた原爆不要の思いが胸に刻まれるはずだから。

愛媛新聞 :朝刊 2015/08/25 面名:地一 ページ:009

(C) 愛媛新聞社　無断転載、複製及び頒布は禁止します。